

總持寺開祖・瑩山禪師を宗派超えて評価

鶴見大学で臨済と曹洞の僧侶が講演



寺満城宗洞曹

徳島県の曹洞宗城満寺が、いながら社会的認知度には主催する講演会「禪の師・瑩」大きな違いがある。曹洞宗山紹瑾大和尚と洞済西門の木村清孝龍宝寺住職(東京大学名誉教授)と、臨済の視点」が23日に鶴見大学で開かれた。(写真)

城満寺は大本山總持寺開祖・瑩山紹瑾禪師が1295(永仁3)年に開山した四国で最古の禪寺。道元禪師は一般にも知られ、『正法眼蔵』は多くの思想家が注目し、さまざまな視点から研究されているが、一方、總持寺の瑩山禪師については資料が十分吟味されておらず、両祖と言

大悲に住して、坐禅無量の功德を、一切衆生に回向せよ」と『坐禅用心記』に書かれておられるように、慈悲に基づく坐禅。利他に貫かれた精神がそこにはある。このことが、現代宗教として示している」と話した。

古川氏は修行時代に行き詰まって悩んでいた時、瑩山禪師の記した『信心銘拈提』が坐禅の大きな指針の一つになったという。『信心銘』とは、中国禪宗第三祖鑑智僧璨禪師が信心不二の禅の極致を説いた書物で、『信心銘拈提』は瑩山禪師が註釈を付けたものである。同書が指針になった理由

柳幹康花園大学国際禅学研究所副所長(准教授)が「木村先生と古川先生は、学問と実践の立場からそれぞれ瑩山禪師について話されたが、同じ重要なポイントがあった。それは私の言葉でまとめると『永遠の仏行』として生き続けるということ。永遠に仏教者として生き続けるということ。そのことを改めて見ていく必要がある」とした。

主催した城満寺の田村航也住職は「今回の講演では、曹洞宗の太祖さまという象徴的な大きな存在から、一人の禅の先生としての瑩山禪師像が浮かび上がり、今後大きいに取り組んでいきたいという思いが湧いてきた」と感想を話している。